

アイヌ民俗文化財
ユーカラシリーズ 72

金成マツ筆録 アイヌ叙事詩

箧伏せ（1）

Ichari koupshi

萱野志朗 訳

北海道教育委員会

箒伏せ（１）

Ichari koupshi

目 次

凡 例

あらすじ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5～18 頁

箴伏せ（1）

Ichari koupshi

翻訳 萱野志朗

《箴伏せ（1）》

1. おばに育てられる私・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21 頁 [1 : 1]
2. 次第に刺しゅうが上達する私・・・・・・・・・・・・・・・・ 24 頁 [119 : 61]
3. おばに育てられ成長する私・・・・・・・・・・・・・・・・ 27 頁 [240 : 127]
4. 何者かの襲撃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31 頁 [362 : 195]
5. 箴の中に隠れる私・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35 頁 [509 : 277]
6. 魔神に見初められる私・・・・・・・・・・・・・・・・ 40 頁 [677 : 371]
7. 魔神を追い返そうとする私・・・・・・・・・・・・・・・・ 41 頁 [732 : 401]
8. 魔神に連れ去られる私・・・・・・・・・・・・・・・・ 44 頁 [843 : 465]
9. 何者かに助けられる私・・・・・・・・・・・・・・・・ 50 頁 [1045 : 575]
10. 兄の手により生き返る私・・・・・・・・・・・・・・・・ 57 頁 [1273 : 697]
11. 年若い少年の語り・・・・・・・・・・・・・・・・ 62 頁 [1477 : 803]
12. 私のおばの思惑・・・・・・・・・・・・・・・・ 70 頁 [1744 : 950]
13. 年若い少年と妹の秘密・・・・・・・・・・・・・・・・ 71 頁 [1777 : 969]
14. 妹の死を悼む年若い少年・・・・・・・・・・・・・・・・ 76 頁 [1948 : 1065]
15. 事の顛末を知り、悲しむ私・・・・・・・・・・・・・・・・ 79 頁 [2048 : 1123]
16. 立派に成長する、年若い少年の息子・・・・・・・・ 79 頁 [2069 : 1135]
17. 魔神に魅入られた私・・・・・・・・・・・・・・・・ 81 頁 [2130 : 1168]
18. 年若い少年の妹の語り・・・・・・・・・・・・・・・・ 83 頁 [2207 : 1209]
19. 私を想う、年若い少年の息子・・・・・・・・ 86 頁 [2303 : 1259]
20. 神への祈祷の儀式を提案する、年若い少年 89 頁 [2400 : 1310]
21. 喜んで支度をする私・・・・・・・・・・・・・・・・ 90 頁 [2440 : 1331]
22. 訝しむ年若い私の兄の息子・・・・・・・・ 93 頁 [2541 : 1385]
23. 年若い私の兄の息子の行いを悲しむ私 97 頁 [2704 : 1473]

24. 美しく年若い女の顕現..... 101 頁 [2833 : 1542]
25. 年若い女の語り 103 頁 [2924 : 1594]

凡例

1. 原ノート

萱野茂二風谷アイヌ資料館に収蔵されている「金成マツノート整理番号29」の Ichari koupshi「箴伏せ」筆録：金成マツ（昭和9年9月30日）の1～140頁のうち1～70ページ分をローマ字筆記体の判読・片仮名化・逐語訳・意識（日本語訳）をしたものである。

本書には、原ノートの頁の始まりを左上に示している。

2. 金成マツノートの整理方法

1 段目 ローマ字のアイヌ語の原文

2 段目 片仮名表記

3 段目 逐語訳

4 段目 意識

となっている。

①筆記体のローマ字を判読する際は、原ノート通りの表記とした。

②片仮名表記は、原ノートに濁音で書かれているものは表記通りとした。

③原文ローマ字段の数字は原ノートの行を累計で示している。1～70頁は原文ノートの頁を示し、その頁の最初の行のところに付記した。

3. あらすじの地名、人名の表記について

本文では「トミサムベチヌタブカ」とされているのを「あらすじ」では「トミサンペチヌタブカ」とした。他のものも「m」は「n」と置き換えカタカナ表記した。

箒伏せ（１）

Ichari koupshi

筆録：金成マツ 昭和９年９月３０日

あらすじ

萱野志朗

<登場人物>

1. 私（主人公・少女）
2. おば（私の育てのおば）
3. 魔神（ニソラッチウェ村の魔神）
4. 人間の男（主人公の従兄妹兄か）
5. 年若い少年（４.と同一人物か。主人公１.の従兄妹兄か）
6. 主人公の母親（１.の母親、４.のおば）
7. 余市に嫁いだおば
8. 人間の男の妹
9. 人間の男の息子
10. 年若い私の姉（８.と同じ人物。前半では妹となっていた。誤記と思われる）
11. 甥の兄（９.と同一人物、すなわち人間の男の息子）
12. 年若い女

「私の語り」

私はおばのところで、実の子どものようにとても大切に育てられ、何不自由なく暮らしていた。やがて私は美しい少女へと成長した。私は呪術を使い自分自身を霧の中へ置き身を隠していた。私のおばの美貌は、どこかの国やどこかの村、そこの住民やどこかの村人でも、その美貌に匹敵する者は一人として存せず、かつ神のような立派な人であった。私の住んでいる家の内側は、立派に飾り立てられ、とても立派な宝檀が山のごとく置かれ、その宝檀の上は神のひかりで光り輝き、宝檀の手前には移動自在の寝台が置かれている。その寝台の周りには、二つ三つの平金が取り巻き、その平金の上には二つ三つの黄金の模様が施され、神の光が明るくひかり輝いている。私は、この神の輝きを見て気分が爽快になった。

黄金の女性用筐かごの列は、とても美しく宝列の端から下座の隅まで続いていた。その筐の前には黄金の枕があり、その枕を使いおばは身体を横たえていた。その上には、どこの出身でどういう身分の人が作ったものか分からないが、黄金の刺繍衣や立派な刺繍衣が、衣装掛の竿てらが撓たがむほどたくさん掛けられていて、上下二段の衣装掛だった。それらの衣装掛けの上には、二つ三つの神光がきらきらと輝いていた。黄金の床はずっと平坦になっており、奥の座から入口の方向の座までひかり輝いていた。黄金製の炉縁はきらきらと光り輝いていた。こ

の住居は、人間の住む所ではないと私には思われた。私はとても気持ちがよくなり、私は昼にはおばの上座へ座して絹織物を使い、私におばは刺繍の仕方を教えてくれた。私は、大きい袋や小さい袋への刺繍をおばから命じられた。刺繍を施した大小の袋をおばに見せたところ、おばはその出来栄えに驚き、驚きのあまり口や鼻から魂が飛び出さないように口元へ拳をあてた。

「おばの語り」

「私の姪っ子は霊力があり、手先が器用なのには本当に驚いた。」と。

「私の語り」

私はおばに褒められたので、喜んで針仕事を続けていたが、ふと顔を上げておばの顔を見た。おばは「ふふふふ」笑いや「くすくす」と笑いながら、笑いを堪（こら）えていた。私は刺繍したのを見て笑われたと思い、とても恥ずかしくかつ腹立たしかった。私は仰向けに寝転び、足をばたつかせながら大声で泣きわめいた。私のおばは、自分の頭を掻きながら、自分のお尻を何度も叩きながら次のように言った。

「おばの語り」

「これは驚いた。私の姪よ、どのような理由で泣いているのだろうか。家の中と外の召使の挙動と会話を見聞きし笑ったのだ。あなたは本当に手先が器用なのだ。私はあなたの作った袋を見て笑ったのではない。今後は、泣かないで下さい。」と。

「私の語り」

私のおばは、いつも通りに私を可愛がり、そのおばの嘘を私は信じて起き上がり涙口のまま目を開いた。そして件（くだん）の袋に私は一生懸命刺繍を施したが、上手に作る事が出来ずおばにあざ笑われ、私はとても腹立たしく思った。私が刺繍した模様は、二つ三つとても立派な雲となり立ち昇っている。その模様の上に二つ三つの神光が一緒に輝いていた。私は自分の作品を見ながらとても楽しくなり、二つ三つの黄金の渦巻き模様を互いに折り曲げ、渦巻き模様の上に二つ三つの黄金の小さい渦巻き模様を縫い付けた。縫い目の始まりと縫いあがりの跡を目で追いながら、毎日まいにち刺繍の針仕事を続けた。私は時を忘れたように刺繍に没頭した。おばは、私の刺繍を笑った人であったが、今は横座に向かって手庇（てびざし）を高くまたは低く捧げながら、私の手前の所で視線を低くし目を伏せながら次のように言った。

「おばの語り」

「まあ、驚いた。最初、私の姪は手先が器用であったのに、今は手先が不器用である」と。

「私の語り」

私は、おばにこのように言われたので、恥ずかしく思い、息を吸う事も吐くことも出来ず、息を止めた。毎日まいにち私のおばは朝の暗いうちから起きて、家の中をきれいに掃き清めた。それから二つ三つの滴をしたたらしながら、美味しい食事を作ってくれた。その食事は、まず私が受け取り食した。おばは私を不憫に思い、私を過剰に可愛がっているのだろうか。今、私は立派に育って美しい少女に成長した。おばは、自分の立て膝の上に顎を寄せ、顔を

上下に動かしながら二つ三つと頷き、私に笑顔を向けながら二人で暮らしていた。夜は、右座の衣装掛の下の方でおばと一緒に寝た。寝巻の小袖をおばと私は一緒に着て、私の袖の半分をおばの上に掛けた。おばは私の事を心配し真夜中に私の頭を撫でまわし、おばは心中で私を心配する様子が見てとれたので、私は胸中で涙を流し、おばに感謝を捧げた。私はどこで生まれどのように育ったのであろうか。実父母がいないので、おばに育てられて成長した。私がある程度成長したならば、私の出生に関する「言い伝え」をおばから聞きたいと思った。私自身が自分の思い通りに動けるならば、おば孝行をしたいと考えていた。私は二つ三つの良い事を考えながら暮らしていた。

夜には、宝物の宝刀の光で昼の日差しが差すがごとく家の中が明るく輝いていた。その輝きを私は楽しみにしていた。また、夜には黒い霧や白い霧が家の中いっぱいに充満し、その中でとても美しい光と一緒に光り輝き、そこで私は暮らしていた。

私のおばもとても手先の器用な人であり、刺繍した模様は二つ三つのとても立派な雲のように立ち昇るように刺された。私とおばの刺繍したものを見て、私は驚嘆と感嘆の念を覚えた。

ある日、ずうっと遠くの大きな国の上手にある乾いた国土から破裂音が響き渡った。何者かがやって来る音が「ゴーゴー」と鳴り響いた。その音がだんだんと近づいて来るのが分かった。いま、初めてこの人間の国が、まるで揺籠の中で揺らされるがごとく、二つ三つの渦巻き風が吹き荒れて、その風で大地が大きく揺れた。この大地に当たる風が「ゴーゴー」と鳴り響き、何者かがやって来る音が聞こえた。何者かが他の地域に行くのであれば良いが、私の住処に向かっていることが私には分かった。

その音を聞いたおばは立ち上がり縫物の針を持ったまま、耳を傾けてじっと聞いていたが、本当に驚いて次のように言った。

「おばの語り」

「よく聞いてください。私の姪よ。何者かがやって来る音はとても喧（やかま）しい。男もおらず、私たち二人で暮らしている所へ乾いた国土からやって来る者たちの音は、良い神や人間が来る場合は成長過程で聞いたことがあるが、今回の音は今まで聞いた事がない。神の御座所とは別の所へ来る者はそれ程恐ろしい者ではないが、神の御座所へ向かって来る者は、全くの魔物で憑神まで私には分かった。」と。「その魔神は良い目的で来た者ではないだろう。私は年を取り老衰し、やがて老死する身であるからどのようにされても何とも思わない。私の姪であるあなたは人間であるが、私の住む城すなわち神の御座所はあなたの神の魂であるのだ。あなたの事が心配で今の今まで私が育ててきたのだ。今日、あなたに「言い伝え」を語ろうと思っていたが、他の日でも語る機会があったが、今日に限って何者かがここへ向かっているのだ。何者かの襲撃に私の憑神もひどく怯えているのが分かった。私は今まであなたを隠して育てていた。神か人間か魔神がこの神の御座所へ入って来た時、決して動かずに息を潜（ひそ）めていれば、あなたは生き延びることが出来るでしょう。」と。

「私の語り」

私のおばは、左座に大きな箆がぶら下がっているのを手に持ち、宝檀の前でその箆を裏返しにして置いた。衣装掛けの下手側そして隅の低いところへ置いた箆の中へ裁縫箱と一緒に刺繍最中のものと共に私は隠れた。私は箆の中で刺繍に没頭し我を忘れていた。

その時、何者かが外の櫓の上に降りて来た。どのような魔神であろうか、足音だけが響いて来る。何者かがこの神の御座所を跨いだところ、この大きな家は揺籠が揺れるがごとく、大きく揺れた。何者かが玄関の戸口で身を振（よじ）る音や身を曲げた音を聞くだけで、陰部をひっかく様あるいは鱗を逆立てるごとく私は気味が悪くなった。

私のおばは私と同じように感じたかどうか分からないが、地面に突き立つ柱のごとくおばは自分自身を落ち着かせていた。何者かが、とても大きな者が外庭に入って来て、私は箆越しに見てみると、小さい山に手と足を生やし、木片をきった白のような形であった。顔は崩れた崖のように、目は淵のように相並び、鼻は垂れ下がる尾根のように途絶え、相對する二つの大きな泉のような体裁で、その下の口は岩穴のようだった。その者の胴の上には岩の棘がいっぱい生えていた。その者は岩の谷川に降りて来て、棘の先に水銀の毒やら水銀の泡が沸き返り燃え爆（は）ぜている。その者の胴の上には梶ほどの大きさの太刀が縫い付けられ、左座には家の天井面が添えられ、しばらく茫然と立ちつくしていた。霧が晴れたので、家の中をよく見てみると内部は美しい様であった。私は内部を見ていたが、私のおばは本当に困っている様子であった。私が油断している隙（すき）にこのように気味の悪い魔神がやって来て、この国で何をしようとしているのだろうか。私は考えあぐねてどのようにすれば生き延びられるか、あるいは助かる方法を皆と一緒に考えた。このような状況に私は泣きたくなった。私は、自分が上手く助かる方法がないかと、心の中で神へ救いを求めた。魔神の口である岩穴から発せられた言葉は次のようなものであった。

「魔神の語り」

「トミサンベチシヌタヅカの人間の淑女よ、よく聞いてください。私の村の名はニソラッチウエと言ひ、私は神である。私に相応しい人を神々の中から探しているが、私の目に適（かな）う神は一柱もない。そこで私は、人間の国々の中を凝らして見たところ、あなたの姪は神よりも美貌と技芸が秀でており私に相応しい人だと思った。私はあなたの姪を迎えに来たのだ。この国の上には、私のような容貌や度胸を持つ者は、一人としていない。私はあなたの姪を見初め、連れ帰りたいのだ。」と。

「おばの語り」

魔神の話聞いた私は、魔神に向かって次のように言った。

「あなたの顔には悪い魂胆が漲（みなぎ）っている。ひどく悪い魔神よ、神の立派な御座所へ恐れ憚らずに訪れ、何と無礼なことを言うのか。神は神同士、人間は人間同士で結婚するのが道理である。あなたのような魔神がどういう理由で、人間の女との結婚を望み、人間の女をかどわかそうとするのか。私はいま姪と暮らしているが、いつも独り暮らしで一人寂しく暮らしており、私は神々と一緒にいるのです。さあ、早く神の国へ戻りなさい。」と。

「魔神の語り」

おばの話聞いて、魔神は大きな口を開いて笑った。その笑い声はビリビリと鳴り響き、そして次のように言った。「人間の淑女が嘘をつくとはどういうことか。久しく人間は、嘘をつかないと言われていたのに、あなたは何故ゆえに嘘をつくのであろうか。私が、神の国へ戻る途中でも遠い地から、毎日まいにちあなたの姪を監視しているのだ。」と。

「あなたは私を魔神と言っているが、私は魔神ではなく尊い神なのだ。あなたの姪は、神の婿を迎えることを喜んでいるようだ。あなたは私に嘘をつき、私に腹をたて、私を口汚く罵（ののし）ってもお互いの利益にはならないのだ。あなたは、私の話を聞かずあなたの姪と私を一緒に行かせないというなら、あなたの姪を連れ出し、一緒に逃げることにする。」と。

「私の語り」

私は策の中へ隠れていたが、魔神の手が伸びる音と共に、私の手が触れその策が落ちた隙に魔神に私は捕（とら）えられた。

「おばの語り」

おばは、姪が魔神に捕まったのを見て、「ああおお」と言いながら飛び起きて、跳び上がって姪の足を引っ張ろうとしたが届かず、姪も魔神の腕の中でもがいたが何もすることが出来なかった。

「私の語り」

私は「あばさん」と絶叫し、私の泣く声が美しく響き渡った。おばは、何もすることが出来ず「姪よ」と言って、泣く声が美しく響き渡った。

「おばの語り」

「忌々しいことだ」と思った。私の親族にはたくさんの勇者がいるが、今は互いに遠く離れたところでそれぞれが暮らしている。魔神が私を馬鹿にするかのごとく、私の姪をさらって行った。私の姪は、いま魔神の膝の上にいるが、あなたの憑神はとても力が強く、あなたが頑張れば、あなたは神の助けで生き返ることができるでしょう。大勢の神々があなたの方へ振り向いてくれるように祈りなさい。

私は老衰し、年老いてしまったのであなたを助けることが出来ない。私は神なので、神々の噂話に耳を傾けます。

「私の語り」

魔神は私を抱えたまま外へ飛び出し、天空上へ昇り沖の方へ飛んで行った。私の耳元には風が巻き起こり、水銀の臭いが充満し、私の心臓は萎縮し溶けてしまいそうになり、とても気分が悪かった。おばが私に氏素性を「言い伝え」で伝えようとしていた時に、魔神に誘拐され、魔神の村へ連れて行かれるところだ。魔神の村の中では生き絶え絶えとなり、後悔の念にかられた。私は泣こうとしたが水銀の臭いで気道が塞がれた。その時に村の上（かみ）の方向から破裂音が響き渡った。腹を立てた神であり速く走る神で、憑神たちの二つ三つの固い音によって、神の守護する天が崩れ落ち粉々になった。陸の方から私と魔神を追いかけ

まわす者がいて、魔神が茫然と立ち尽くしていた。私は周りの音に耳を傾けていると、雄叫びと共に私たちの後を追っている者が起こした二つ三つの渦巻き風が私たちの前方へ巻き上がった。魔神に抱えられていた私を、まるで草を抜くかのごとく、魔神から私を抜き取り、何者かの腋の下に抱えられた。「人間の男」は次のように言った。

「人間の男の語り」

荒々しい言葉で「ああ嫌だ。」ニソシッチウエの魔神の振る舞いは不思議に思う。神々の目を欺き、トミサンベチシヌタツカには人間の女たちだけで、男はいないと思って、お前は神の御座所へ侵入し、私の妹に手を出したのだ。お前は死にたくて、件（くだん）の行為を行ったのだろうか。私を只の人間と馬鹿にしても無駄である。人間は真っすぐな心を持っていれば、後ろ盾となる憑神がいるのだ。したがって、理由も無しに神の御座所から償いをせずに私の妹と一緒に逃げることは出来ない。魔神に向かって「さあ、かかってこい」と私は言った。もしも魔神のあなたが私に打ち負かされたのなら、あなたには神罰が下り、あなたは魔神であった事さえ覚えていないだろう。私は鷹のごとく、魔神の頭を足で攻撃した。魔神はとても驚き、互いに雄叫びを上げながら戦った。魔神が振り向いた瞬間、私は魔神の頭を踏みつけた。すると岩が崩壊する音と共に魔神が崩壊する音が「ゴーゴー」と響き渡った。魔神は梶ほどもある太刀を鞘から抜き、激しい太刀影を高くまたは低く振り太刀風を起こした。私はその魔神の脇腹や背中などを蹴りつけた上で頭を踏みつけた。魔神は私に全く抵抗出来なかった。魔神の息使いが激しくなり、何者かの憑神たちの二つ三つの重い音が魔神の上に群がり、私はその魔神を海の底へ踏みつけた。魔神は潮水や海水でむせ返り、その声が海底に響き渡った。私は、魔神を数十回踏みつけ、岩や石の鎧を粉々にして木っ端微塵にした。すると本来の姿である生身の裸が現れた。

それと同時に私（人間の男）は、鳥のごとく素早く動き手元の光と共に魔神に激しい太刀影を走らせ、魔神が振り向いた時には千切れた肉片があちらこちらに飛び散った。口から水を吐き出すがごとく魔神の生霊が死者の国（ポクナモシリ）へ向かって行った。反対に地上の国へ姿を現す魔神を踏みつけ、国の上手や下手に現れる魔神を先回りして何度も踏みつけた。これを数十回繰り返した。魔神は私（人間の男）への反撃を諦めて、死者の国（ポクナモシリ）へ向かって行き「ゴーゴー」と鳴り響いていた音が底の方へ沈んで行った。二～三の柱の神々がお亡くなりになり湿った国（テイネポクナシリ）へいらっしゃり「死の音」（神が死んだ時に出す音）が休んでいた。私（人間の男）は、祈り言葉を唱えながら自分の身体を祓い清め、祈り言葉を唱えながら唾や痰を何度も吐いた。私（人間の男）は、自分自身の身体を拭き清めて、私の妹を脇に抱えて天空上に昇って行った。すると、その昇る音が「ゴーゴー」と鳴り響き、首領の威風が烈風のごとく私の妹に吹き付けた。

「私の語り」

その時、私は元気がなくなって意気消沈した。しかし、危うく死にそうになったが生長らせることが出来た。よく考えると、私は淑女の子孫であり、死にそうになったが、神のような人間のような人（私の兄）に生き返らせてもらった。私は兄に助けられ、兄妹の関係も新

しく築けた。兄の救出劇や私の憑神たちの働きに心から感謝した。また、私のお婆は「どれだけ私の事を心配しているだろうか」と考えた。私は心の中で「お婆さん。」と囁（ささや）きながら、どこかへ昇って行った。そこを見てみると、何と言う村であろうか。人口は少ないが立派な村であった。村の上は平坦になっているが、村の真ん中には険しい丸山が高く聳（そび）えていた。私は外の櫓の上に降りて村を眺めた。この村には大きい家や大きい城が重なり合うように建っていた。家や城の外壁は、とても立派に飾り立てられていることに感心した。私は玄関の入口で向きをかえると、そちらから宝器や家宝の香りが烈風のごとく押し寄せ少し後ずさりした。私は簾戸を揺らしながら外庭の上に風と光と霧と共にさっと入って行った。

黒や白の霧が家の中に充満し、私は左座に長く横たわっていたので、本当に衰弱していたため、以前のように働くことは出来なかった。私は、瞼を開けたり閉じたりしながら恐れ慎しんでいた。私は身体を伸ばされるような感覚で横たわっていた。すると、何者かが囲炉裏から火を掘り起こしながら火を焚く気配を感じた。それから、何かを作っている気配を感じたところ、私を抱き起こし、私の口にお椀でよい薬を流し込んだ。薬の香りを嗅ぎながら二つ三つの湯気をかき分けてよい薬を飲んだ。すると、私の心臓は頭から尻まで落ち着き、本当に元気になった。何者かが横座に着座した。私は顔を上げて髪の毛の先を床につけ、その髪の毛の隙間からその着座した人を見た。見てみると薄くかげる霧が立ち込め、はっきりと見ることが出来なかった。そこで呪術を使い、二つ三つの霧の中心を掻き散らしてみたが上手くいかなかった。長い間、何度か試みてようやく霧の中で「年若い少年」を見ることが出来た。その年若い少年は、喪に服しているのか、裏返しに黄金の小袖を着ていた。裾や襟元の上には幅広い平金が取り巻き、小袖を襲ね着していた。黄金の鎖を胴に巻き、黄金の小さな笠を被り、笠から垂れた紐で顎の下からきつく締めていた。笠の縁から神々しい顔が現れた。その顔は天の太陽のごとく照り返り、とても立派な髪の毛が背中の中ほどまで垂れている。成長過程で肉親を失ったらしく、二つ三つの悲しい顔色であり、顔色は優れなかったが、勇者の顔つきであった。一点を凝視しながら次のように言った。

「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

「トミサンペチシヌタヅカの私の妹よ、よく聞いてください」と。

私はあなた（私の妹）とこのように会えるとは思っていなかったが、うまく再会できた。私たちは、周りのみんなから嫉まれていた。あなた（私の妹）を魔神がかどわかして連れて行こうとしたが、私の憑き物が強かったので魔神を退治し、あなた（私の妹）を助けることが出来た。ニソシッチウエの魔神は、神でも人間でも匹敵する者がいないくらい強敵であったが、うまく打ち負かすことが出来、私は安心したのだ。私はどのようにしてあなた（私の妹）を生き返らせたのだろうか。あなた（私の妹）は不思議に思うでしょう。理由を聞かせましょう。その昔、トミサンペチシヌタヅカには、あなた（私の妹）の父と父の妹と二人でくらしていた。あなた（私の妹）の父は、容貌と度胸そして雄弁さは神々の中にも人間の中にも匹敵する者は一人もいなかった。あなた（私の妹）の父とその妹の二人は、二つ三つの

国を超えてとても立派な評判が立ったのだ。

私の村は余市であり、イヨチウクルが私の父で男兄弟はおらず、父の妹が一人いて、私の父は本当の勇者であり、父は父の妹と共に評判が立ったのだ。トミサンペチの神の私のおじたちと一緒に先祖を持つ者で本当に仲が良かった。

天の狼神は、兄弟が二人で二人の妹と四人兄妹であった。妹の二人のうち年少の妹は、天国に嫁ぐことになっていた。天国には自分に相応しい者がおらず、人間の国を見てみるとあなた（私の妹）の父に恋こがれ、宝物と共にタマサイ（首飾り）を掛けて人間の村へ嫁いで来たのだ。周辺の者たちが、あなた（私の妹）の父の美貌や容貌に嫉（ねた）み妬（そね）んでひどい戦いをトミサンペチシヌタツカに仕掛けたのだ。自分の村を守るためにあなた（私の妹）の父とその父の妹は、イヨチウクルの妹と共に戦ったのだ。三人で二つ三つの沖の国を追い回されながら成長した。毎日が戦いでいくさであり、全身の肌身の上に辛酸を嘗める生活を共にした。戦いの休戦時にトミサンペチのあなた（私の妹）のお婆が余市の村に嫁入りしたのだ。余市の私のお婆は、トミサンペチに嫁入りした。人間の女と神の女が、余市とトミサンペチへそれぞれが嫁いだ。あなたのお婆から余市で生まれたのが私なので、私には妹が一人いる。トミサンペチへは、神の女と人間の女が同じ人へ嫁入りした。神の女と人間の女は、とても仲が良かった。トミサンペチの人間の女からは、一人の女が生まれた。トミサンペチで神の女からあなたが生まれた。私たちの母親たちは、人間の国では落ち着いて嫁ぐことが出来ず、お互いに憎み合い何かには怯えて「びくびく」しながら暮らしていた。本当に血が滲むような苦勞をしたので、「神の国へ行って、本当の結婚をするつもりだ」と言って神の国へ複数回行き、次のように言った。

「主人公の母親の語り」

「年上の娘は、余市の私の甥と一緒に育てられ、年頃になったらその甥っ子と結婚することになっている。二人の間に男の子が生まれたならば、私の年若い娘と結婚させ、トミサンペチの住居に住み、上流と下流を治めるならば、私の死後も子孫が繁栄していくだろう。」と言った。

「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

今、私の従兄妹の妹を育てているお婆は、この余市に嫁ぎ自分の娘と私（お婆の甥っ子）と二人一緒に育てた。お婆の娘は大きな口を利きちょっと下品であった。お婆の娘は使いに出すことが出来るくらい大きくなった。ところが、私（お婆の甥っ子）はまだ幼かったが、やがて大きくなり一人で独り暮らしをしていた。わたしは、昼間遊びの小弓で遊んだりして過ごしたが、私の親族が私の世話をしてくれた。私は嫌な思いや辛い思いをすることもなく、よく食べて暮らしていたが、夜になると寂しい思いをして過ごした。

「お婆の語り」

私（主人公）のお婆が次のような言伝を残した。

「私の甥っ子殿よ、よく聞いて下さい。私の娘とあなた（甥っ子）と一緒に育てられ、従兄妹同士であるがお互いが成長し大きくなれば結婚することになっている。私の娘はかなり

成長したが、神の国へ行く事もなく、あなた（甥っ子）は一人でいて寂しく思っているだろう。誰かを使いに出し、あなた（甥っ子）の妹をここへ迎えて、あなた（甥っ子）の話し相手になるようにして下さい。トミサンペチにいる私の神の姪っ子を立派に育てるつもりです。

「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

私は淑女たちを使いに出し、私の妹を招待した。妹がわが家へ来て、私と妹の両方が喜び、話をして楽しんだ。私たち兄妹は仲がよく、寂しかったので夜になると、一つの寝床で二人は寝た。周りには他の人がおらず、私たち兄妹間で性交をした。私はまだ幼かったが私の妹を孕ませてしまった。私たちは、大人の人目を忍び、私たちの関係を秘密にしながら、妹を大切にしながら暮らしていた。家の奥の方で七転八倒となり唸り声を上げ、かすかに振り返った。私はその様子に驚き、親族たちに危急の知らせをした。私の親族は狼狽し、初めから知っていれば驚かなかったであろうが、私の妹はとても小さい赤ん坊を産んだ。私の妹のお腹はとても痛み、親族の者が呪（まじな）いをかけたが全く利かなかった。

「私（年若い少年）の妹の語り」

私（年若い少年）の妹は、次のような言葉を遺した。

『「年若い私の兄」よ、よく聞いてください。私たち兄妹は、とても気が合い仲良しであったが、私は産後の肥立ちが悪く、いま私は、自分自身が嫌になりいつも死ぬことばかりを考えていた。出来ることであれば、神の村へ「年若い私の兄」（人間が神の国へ行くことは死を意味する）を連れて行きたいと思ったが、「年若い私の兄」がいなければ余市の神の立派な御座所を守ることができず、私は神から罰せられるでしょう。』と。

「私の小さい赤ん坊は、本当に気の毒に思い、その赤ん坊を憐れんだ。私の赤ん坊を立派に育て、私の息子が健康に成長し大きくなったなら、トミサンペチシヌタブカの私の神の妹と結婚させて欲しい。私の神の妹と私の息子との間に男の子供ができれば、その男の子に余市の神の立派な御座所を託すようお願いします」と。「そういう状況が成就したのを知った時、私はあなた（年若い少年）と神の国へ旅立ち、神の国で本当の結婚をするつもりです。」と。素晴らしいながら「私（年若い少年）の妹」は息が絶えてしまった。

「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

私は投身自殺し、私の妹が遠い所にいるのか近い所にいるのか分からないが、探し回ろうと思ったが、妹の「遺言」に背くことになるため我慢した。私の親族の人たちは私を憐れみ、二つ三つの良い話を私に伝え、私は二つ三つの飾りを施した妹を葬った。私は、これらの事情をトミサンペチシヌタブカのおばへ伝えるのは憚られ、また恥ずかしく思った。私の妹（主人公の少女）は人間であったが、「トミサンペチ神の魂」であるから、私は妹（主人公の少女）を気がかりに思い、おばの妹（主人公の少女）への世話には感謝している。おばが、悪い国の妖怪のような妹（主人公の少女）を育てる事は、私は気の毒に思った。私は私の親族たちと相談し、私の息子が一人前になった時、私の妹（主人公の少女）と結婚させ、トミサンペチの神の立派な御座所を守ることが出来るでしょう。おばが、私のことを心に懸（か）

けて、腹を立てたととしても、おばは逆に自分自身を宥（なだ）めることが出来るでしょう。こういう理由で、今までの事情をおばには伏せていたのだ。私が私の妹（主人公の少女）は、神と同等な力を持つ人間の年若い童（わらべ）であったが、気力がなくなり弱々しくなった。私は妹（主人公の少女）の成長を心配していたが、私の息子は幸運にも健康に成長し一人前の男になったのだ。

「私の語り」

私は、事が起こっている間じゅう、泣いてばかりいて過ごしていた。私には予見能力があり、私の兄（本当は「従兄妹兄」）の息子が幸運にも健康に成長したことを透視していた。「よい人と会ったならば迷わずに結婚するものである。もし、あまりにも結婚が遅ければ、二つ三つの間をおくと、悪い神が二人の結婚を邪魔するので悪いものだという先祖の言い伝えがある。」と。

「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

その事情を私の息子に教え諭した。もう息子は一人前の男にまで成長したのだ。

言い遺された言葉の通り、一日二日あなた（主人公の少女）は年上であっても、私の息子と結婚（炊事を作るということは結婚を意味する言葉）し、先祖の城とその内部を、あなたたちは上流の方と下流の方を治めるように私は教えた。あなたたちは、「甥の兄」と「おばの妹」と呼び合っているのだ。

私の息子は、二人の男を乗せて殿の国へ交易にいくため舟を漕ぎ出し、やがて交易から帰ってきた。私は、気苦勞しながら妻と寄り添い、神々への先祖供養をして安心した。それから立派な神の贈り物やみやげを持って、トミサンペチシヌタツカのおばの所へ神と親族と共に訪れ謝罪するつもりだ。私と息子はトミサンペチシヌタツカで結婚することに合意し、われわれ皆でトミサンペチシヌタツカへ向けて舟で出かけた。

「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

「そのあとでまったくの悪神（魔神）が、あなた（主人公の少女）を危うく掠（かす）めとる様子を私は透視し、私があなた（主人公の少女）のところへ駆けつけて救出したのだ。」と。「あなた（主人公の少女）を「妹よ！」「心臓よ！」と言ってしっかり押さえ、あなた（主人公の少女）の頭を撫でさすった。類いまれな勇者である私が、二つ三つの声なき涙をあなた（主人公の少女）の上に落とした。」と。「まさか、あなた（主人公の少女）がこのような状況にあるとは思わなかったが、あなた（主人公の少女）は魔神に魅入られ危うく誘拐されそうになり、私も妬（ねた）まれた。」のだ、と、いってあなた（主人公の少女）の頭を撫でた。

「今初めて自分の先祖や親族の様子について、それはまさに美しい姿であると聞かされたが、私は随分と長いあいだ、国が揺れるがごとく戦いやいくさをしていたのだ。私の両親も周りからの妬（ねた）みや嫉（そね）みという理由により、早いうちから神々の国へ行く事になった。私にはどうすることも出来ない。私の悪い思惑により、年若い私の姉（前半では妹となっていた、誤記と思われる）を思い出すこともなく、会う事さえしなかった。私は

その姉（前半では妹となっていた）を孕ませ、そのためお腹を痛め死んだのだ。」と。

「年若い私の姉（前半では妹となっていた、誤記と思われる）の語り」

私は妊娠し、赤ん坊を産むときに腹が痛くて死にそうになり、息が絶えた。神の住むところでも「年若い私の兄」は私を慰めた。私が淑女の心を持っていることに感嘆した。私は「年若い私の兄」に腹を立てることも出来ず、二人の間の秘め事は承諾の上であった。したがって、「年若い私の兄」の事を気の毒に思い、「年若い私の兄」は美しく勇敢であり、座する姿を見て、私は感嘆した。「年若い私の兄」や私の親族はとても立派であり、このような立派な親戚を持っていることに感心し、心の底から「年若い私の兄」を恋慕した。

「年若い私の兄の語り」＝「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

年若い私の姉が生きて戻って来るならば、私は一緒に喜びたいと考えている。私は二つ三つ悲しい気持ちを抑えられずに、私の泣き声が美しく響いた。私は「姉よ」と言い、姉は「お兄さんよ」と言った。姉は、私の裾端を握り締め、私の膝がしらを撫でさずって生きて戻ることが出来たと姉は私に感謝した。私は、二度～三度と姉を撫でさずり、とても安心した。私は姉の心を透視することが出来、尚一層姉を可愛がった。

「私の姉の語り」＝「人間の男の妹の語り」

どうにかして私の息子とあなた（主人公の私）は結婚して非常に立派な御座所に住んでくれるのなら、神々も喜んでくれるでしょう。そうすることによって私も安心できるでしょう。

「人間の男の息子の語り」

私はまだ若者であるが、私の妹（主人公の私）を思う者は私以外この国の上に一人もいなかった。

「私の姉の語り」＝「人間の男の妹の語り」

「私は、この人間の国の上に住んでおり、恋愛はしないつもりだ。私は、神の村でまことの結婚をしようと考えている。その日が来ることを希望しそれが叶うように祈っている。」と。

「年若い私の兄の語り」＝「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

あなた（主人公の少女）は神と同等の能力を持つ人間であったが、その立ち振舞いが悪かったために成長過程で心を病み、私はあなた（主人公の少女）を不憫に思い、二つ三つの泣きの涙に掻きくれて、二つ三つの良い話をしてあなた（主人公の少女）を慰めた。

「私の語り」

私は、「私の年若い兄」と赤子の時から一緒に育てられ、「私の年若い兄」も一人前の男に育ち、私と「私の年若い兄」との間には許婚（いいなづけ）の約束をしていた。「私の年若い兄」が殿の国へ交易に行き、その後トミサンペチシヌタナカの村を訪ねる予定であったが、私はその事を全く知らず、魔神が突然、私たちの村を襲い、私は誘拐され魔神の村へ連れて行かれた。そこを救ってくれたのが、「私の年若い兄」だった。私も私のおばも幸運にも助かったらうかと、考えていた。すると、「年若い私の兄」は次のように言った。

「年若い私の兄の語り」＝「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

「私の妹よ！よく聞いて下さい。」と。私は、長い間、嘆き悲しみ、魔が差し喪に服したように着物を裏返しにして着ていた（着物を裏返して着る行為は、喪に服する行為）。私は、長い間、人間や首長の行いをしていない。二～三日経てば、私の息子が交易から帰って来るだろう。私は神を継ぐ者であり、先祖を継ぐ者であるから、最初の本幣を削り、最初の酒杯を捧げる者である。良い具合にあなた（主人公の少女）がいるので、家の中を掃除してくれるならば、神への祈祷の儀式をすることが出来るでしょう。

「私の語り」

私は、「年若い私の兄」の話に納得し、私は喜んで跳び上がり、「年若い私の兄」の前に行き、その兄を座らせて、今まで着ていたものをことごとく別の着物へ取り替えた。「年若い私の兄」は黄金の小袖を襲ね着している。「年若い私の兄」の様子は、本当に立派な神のような風体であり、神と同等の人間だった。「年若い私の兄」は、薄くかげる霧の中へ自分自身を隠し、次のように言った。

「年若い私の兄の語り」＝「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

「あなた（主人公の少女）は炊事の用意をしなさい。私の息子が戻って来て、あなたたち（主人公の少女と私の息子）は会う事ができるでしょう。私は神への祈祷の儀式を執り行う。それから、私の数少ない親族を連れて、トミサンペチシヌタツカのお婆の所へ皆で訪ねよう。私は事の経緯を説明し、お婆に謝罪をします。お婆は、神に見守られながら床に伏しているが、心配は無用である、と思う。」と。

「私の語り」

私は、「年若い私の兄」の話聞きとても喜んだ。私は、「年若い私の兄」の行方とお婆を心配していたが、無事であると聞き安堵した。私は下座へ行き、二つ三つの水の滴をしたたらせながら炊事に精をだし、「年若い私の兄」へ良い食事を捧げた。私も自分自身で食事を取り、元気になり二～三日暮らしていた。私の結婚相手である「年若い私の兄」の息子に会いたいと思っていた。夕暮れ時になり、波打ち際から男の若い声で煽りたて突き刺すような言葉が発せられ響き渡った。

「人間の男の息子の語り」＝「年若い私の兄の息子の語り」＝「甥の兄の語り」

「私は聞こうとは思わなかったのに、父の悪い行いを噂で聞いた。父はみだらな心に取り憑かれ、トミサンペチシヌタツカのお婆の妹を呼び、夜も昼も交合し楽しんでた。私（年若い私の兄の息子）には、二つ三つの良い話を教え交易に行かせたのだ。私は、その事に全く気づかず殿の国へ交易に行き、私は殿には可愛がられ、毎日引き留められながら立派な贈り物と酒と一緒に背負って帰って来た。私は、恐ろしい程後悔しながら帰って来たのだ。二つ三つの悪口雑言をぶちまけた。

「私の語り」

「私には、舟の進路が曲がり向こう側の浜に上陸するように思われた。村の上端に大声で呼びかけ大勢の人々が海岸に現れ、交易品を陸揚げしていた。はるか遠い村へ交易品を運び

入れるように伝えた。」と。「年若い私の兄」は、次のように言った。

「年若い私の兄の語り」＝「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

「私の悪い息子の馬鹿野郎は、独り言を言って私に恥をかかせた。これはとんでもないことである。若い少年のまだ子どもが、殿の国に行き毎日神の酒で宴を催し、酒を飲み酒の精に取り憑かれたのだ。私は、息子の嫁になる主人公の少女と二人で暮らしていて、主人公の少女が、私の息子へ炊事をする（これがすなわち結婚を意味する）様子を予見していたが、私の息子が喜ばないならば、人を嫉む心を持っている証である。仮に酒に酔っていないとするならば、私の息子は後悔するでしょう。」と。

「私の夫となる男の語り」＝「人間の男の息子の語り」＝「甥の兄の語り」

「私は、二～三日しっかり気が持てるように努めた。私は、何か悪い行いや悪い心を持ったのであろうか。私には分からないが、本当の事を知っているのは神のみなのだ。したがって、私には恐ろしいものもなく、私が困るような話も一つも無い。」と。

「私の語り」

勇者であり首領である「年若い私の兄」は、腹を立てることも無く、私を何度も可愛がり、二つ三つの良い話を聞かされ、私はそれを信じていた。私は、心の中でめらめらと燃え上がるかのごとく大いに腹を立て、気も狂わんばかりになった。「年若い私の兄」の息子が言った事が、酒が言わせたとしても、この場所に私がいることを知っているのなら、淫欲でも淫乱と透視したとしてもお互いに無我夢中になることを知るべきである。悪い事でも良い事でも、それらの事柄を公にするだろうか。ひどい嘘やとんでもない嘘を言ったことに対して、心の底から腹が立ち、不愉快になった。このように言う者には、心がないのだ。「年若い私の兄」の息子は、知恵が足りない者であり、私は、自分の結婚相手がどこで生まれ、どういう育ちの人かとあれこれ考えながらいて、会うのをとても楽しみにしていた。ところがあなた（「年若い私の兄」の息子）の発言で私は恥をかかせられ、皆も一緒に恥をかかされた。私はとても恥ずかしくなり、二つ三つの澄んだ涙を落としながら暮らしていた。

毎日このように暮らしていたが、村の上手から明るい夜明けまたは暗い夜明けに、大勢の人々が爆発音を立てながら、山手の山や山地の上に休憩していた。日暮れになっても大勢の人々が下って行く音が鳴り響き、上手の村で休憩している。このような音が毎日続いているので不思議に思っていた。件（くだん）の「甥の兄」（人間の男の息子）の噂を聞きながらこのままひっそり暮らして良いのだろうかと考えた。「年若い私の兄」は次のように語った。

「年若い私の兄の語り」＝「年若い少年の語り」＝「人間の男の語り」

「村の上手の城の内部には私の親族である、六人兄弟と六人姉妹たちが暮らしている。六人兄弟も六人姉妹ともまだ幼かったが、全員が首領であり勇者であり、姉妹の方は淑女ばかりが集まっている。私の悪い息子が、近くにおいてやがて私を訪ねて来ると予見した。村の下手の城へ私の悪い息子が泊った翌日から大勢の人たちが押し寄せている。

ちょうどその時、村の上手の真ん中辺りで破裂したような音が響き、神が降臨される音が鳴り響いた。しばらくすると、家の庭の上に何者かが降りてきた。人間の足音がとても速く、

男と思ったがそれは女で、懐刀が美しく鳴り響いた。その女は玄関の所で身を回転させ、簾戸を風のように揺るがした。そして敷居を跨いで家の中へ入って来た。その「年若い女」を見てみると、私と同じくらいの年齢で飾り立てかつ美しく育てられたことが分かった。私は、その「年若い女」を褒める言葉が見つからなかった。その女は、稲妻や霧で覆われているため、初めは見る事が出来なかった。ようやくその女の顔を見る事が出来、気苦労か心配事のために疲れているらしく、顔色が優（すぐ）れず、泣き暮れていたらしく涙腺がただれた様子だった。その女は、恐れ慎しみながら、庭の上に座っていたが、次のように話した。

「年若い女の語り」

村の真ん中の「年若い私の兄」よ、私の連れ添う神よ、よく聞いて下さい。「甥の兄」、私の弟君は、交易に行ってから自分自身に腹を立てた挙句の果て心を病み、神の住む所から立ち去り、私の住む所にやって来ました。私は、「甥の兄」が来たことは喜んでいました。ところが、「甥の兄」は、毎日暗いうちから起きて、私の兄たちや姉たちを起こした。六つの緒がついた大きな鍋で料理を作り、食べ物を運び、私たちに捧げるのでそれらで食事をした。遙か遠い所に住む私の兄たちや姉たちを誘って山へ入り、夕暮れには大きな鹿の荷物を背負って帰って来た。そして、自分で料理を作り高盛のご馳走を、私たちに捧げ、私たちはそれを食した。私の兄たちや姉たちは本当に疲れて、十分眠ることが出来ずにいた。「甥の兄」は、夜明けには起き出し、私の兄たちや姉たちは起こされ驚かされている。「甥の兄」は、作った料理を自分も食べるならば良いが、一口も食べず、本当に痩せ細り骨に皮が覆い被さっている様子なのだ。不眠不休で毎日、食事を作り、私たちに提供しているが、「甥の兄」は、なぜこのような辛い思いをするのだろうか。

私の兄たちや姉たちは、毎日鮑採りをしたが、本当に疲れて眠くなるが、眠ることも出来ず、姉たちは一緒に泣いていた。「甥の兄」は、神のようなお方に食事をさせたいという意志で行っているが、それをどうすることも出来ない。私の兄たちや姉たちは、私に小声で言い付けた。「かくかくしかじかであるから、シヌタブカから私の神の妹が来ているので、どうすればよいか相談しなさい」と。<終わり、続く>